

(1) 中学年部会

単元名 「心をつなごう～チューリップ苑のお年よりとふれあおう～」(第4学年)

授業者 東部小学校 高木 三智子 教諭

目指す子供像を意識し、子供の思いや願いを大切にしたい単元をどのように構想すればよいか。

相手のことを考えて主体的に行動したり、相手とのかかわりを通して自分を見つめたりすることができる子供の姿を願って、双方向的な人とかかわりを生み出す単元を想定した。子供たちは自分とは年齢も身体的状況も大きく異なるお年よりとかかわることで、始めは大きな驚きととまどいを感じるだろう。そして、直に触れ合う活動を繰り返しながら、「心をつなぐとはどういうことか」「自分にできることは何か」など自然と学習課題に向き合っていくであろう。一人一人の子供たちが「心をつなぐ」に思いをもち、切実な課題を見つけ、自分を見直しながら追究を進めていけるように、教師は、子供を丸ごととらえ、願いの達成に向けて支援していく。

追究を広げたり深めたりする場として、話し合いをどのように設定すればよいか。

子供たちは、自分の働きかけに対するお年よりの反応を敏感に受け止め、自分なりの願いをもちつつある。そこで、活動の様子や言葉、カードの記述など様々な事実を連続的につないでとらえ、活動の背景にある子供の思いを探る。そうすることで、一人一人に応じた教師の支援を想定することができる。また、そうした子供同士がかかわることにより、これまでの追究で生まれた見方や考え方をどのように深化させていくかという視点での話し合いの構想が具体化できる。「もっと心をつなげたい」という思いが追究を連続させる原動力を生み、「心をつなぐ」ことについての自分なりの考えを見つけていくことにつながると考える。

子供の追究を見つめる評価はどうあればよいか。

学習活動を文章で表す自己評価カードの中に、「自分」と「お年より」との間を線でつなぐという表現方法を取り入れる。そのことによって、子供自身が双方向の「心のつながり」を意識しながら、取り組みを振り返ることができる。また、言葉では言い表しにくいイメージやそこに表現される一人一人の思いを学級全体で即座に共有することが可能になる。行動観察や子供との対話、学習カードの見取りのほか、学級で共通したこのような自己評価を行うことは、個と集団の両面からの子供理解につながり、よりよい学習支援に生かすことができると考える。

(2) 高学年部会

単元名 「もっとかがやけ！わたしたちの学校 明日へつなぐ、わたしの30周年記念」(第5学年)

授業者 堀川南小学校 細野 友典 教諭

子供が学ぶ意欲をもち、主体的に追究を進めていくための単元構想はどうあればよいか。

創立30周年を迎える学校に対する思いを深める中で、自分たちの暮らしをよりよくしていくこととする子供の姿を願って単元を構想した。活動を進めていく際には、自分の課題に学びがいを見だし、意欲的に取り組んでいくために、自分にとって「かがやく」、「つなぐ」とはということなのかについて、絶えず立ち戻り、考え直す場を取り入れていくことが大切である。また、学校に対して熱い思いを抱いた方々との交流の場や、学級の仲間の取り組みの様子や考えに触れる場を子供の意識の流れに沿ってタイミングよく設定していきたい。さらに、自分らしさを生かし見通しをもって進めるために、イメージマップを作成し、1学期の学びを生かして自分の願いやどんな活動をしていくかを明らかにし、主体的に活動を進めていけるようにしたい。

子供の追究を広げ深めるための支援はどうあればよいか。

1学期に子供たちが調べた事実やその時々思いを学校の30年間の歩み(年表)の中に位置付けるとともに、2学期は、活動の様子や満足度を示した活動カレンダーを掲示していくなど学習環境を整備する。それにより、子供たちは互いの取り組みの様子や心の動きを知り、目当てに向かってがんばる友達の姿に励まされたり、課題が似通っている者同士が情報交換をしたり、グループを作って分担して活動を進めたりしていこう。学習は子供が主役である。教師は、振り返りカードから一人一人の悩みや願いを的確に見取り、その思いを大切に支援に生かしていかなければならない。また、話し合いの中では、テーマを再度意識させることで、自分の活動を見つめ直したり、自他のよさを認め合えるようにしたりして、次の活動への見通しがもてるようにしていきたい。

一人一人のよさや可能性を的確にとらえ、それを伸ばすための評価はどうあればよいか。

単元の全体計画に沿って、活動の節ごとに具体的な場面でどれだけ目指す子供の姿を豊かに思い描くことができるかによって必要な支援の在り方も見えてくる。「活動を支える力」を提示して付けた力を意識させるとともに、活動カレンダーや振り返りカードを十分に活用していきたい。また、国語科など他教科との関連も視野に入れ、「伝える力」「聞く力」などに焦点を当て、学校行事などさまざまな教育活動の場でその成果を見取っていく必要がある。